

ビラーン族コミュニティーにも広がるパイナップル契約栽培

－懸念される契約終了の10年後－

12月の現地訪問2日目、私たちは今までだったら考えられないようなスケジュールを組みました。サムラングを經由して建設中のミアソン寮を訪ね、さらにアトゥモロックの日帰り訪問をしようというものです。実際には、雨続きでアトゥモロックへの道は危険という情報が、10月に配備したばかりの無線で入りましましたので、ミアソンから引き返しました。いずれにしてもこのような強行軍を考えられるようになったのは、サムラングに至る道が、手前30分ぐらいのアルキカンまで見違えるほど良くなったからです。6年前に初めてその道を通った時は、大穴や大石で四輪駆動車もしばしば立ち往生したのに、今回車を止めざるを得なかったのは、唸りを上げるブルドーザーに出会った時の1回だけです。

この道路補修は周辺で急速に増えているパイナップル畑と関係があります。アルキカンの住民も、特に道路沿いに畑を持つものは、コーン栽培からパイナップルの契約栽培に変えていきました。この選択が決して住民の幸せにつながることを他の事例で知っているCMBは、機会を捉えて住民に忠告してきました。しかし、ドールフィリピンからの契約金(1ヘクタールあたり年額9万ペソ)は、現金収入のほとんどない住民には抗しがたい魅力あるものです。ちなみに9万ペソは、山岳部ビラーン族年収の5-10倍にあたります。苗代(2年ごとに植替え)、肥料代、カラバオ(水牛)借り賃等の経費を差し引いた実質収入は決して多くないはずだという情報も、規格外のパイナップルをドールは買わないという話も住民の耳に届かないようです。

10年後に返還された土地の生産力低下がまた問題です。モノカルチャー(単一栽培)の弊害で地力が落ちて、もとのコーン栽培が出来ない恐れもあります。

アトゥモロックやラムブソンのような交通不便なところは、幸か不幸かこのような多国籍農業資本の投資の話はまだ全くありません。助成金で組合育成事業を実施して、それぞれ3年と2年が経過した両コミュニティーで、これからどのように現金収入を増やしていくか、私達にとっても今年の主要課題になりそうです。

－ 奨 学 生 近 況 －

	<p>普段は大学の寮に住むボニファシオ(MSU/ミンダナオ公立大学1年農学部専攻)も、週末はノビシエイトの寮に戻り、下級生達のよき相談相手だ。</p> <p>MSUは、モロヤチボリ、ビラーンなどの少数民族枠があつて、学生の多くはコミュニティーの仲間のために、専門的知識や技術を身に付けたいとがんばっている。有機農業を勉強したいというボニファシオに、日本のアジア学院(農村リーダーなど国際人材養成学校)の話をしたら目を輝かせていた。今最も期待できる奨学生の1人である。(写真はボニファシオ。MSU男子寮前で)</p>
<p>無資格教師は教壇に立てないというDECS(文部省)の厳しい法適用で、ゴンサロ、チャリタ、ロウエンダの3人は今、マーベルの大学で不足単位を習得中である。しかし、いずれも初等教育課程の編入試験に失敗して、別の課程を選択したことが今回分かり、現地責任者のノーマとともに、対応に頭を悩ませている。</p> <p>2人目の子どもを出産したばかりのロウエンダを含めて3人とも勉学継続の意志は固い。小学生でなく大人たちの識字教育など、コミュニティー開発指導のプロとしての復帰を期待することになるだろう。</p>	
	<p>ようやく狭い仮住まいから、新築のミアソン寮に移った14名(うち奨学生は6名)の子ども達。資材輸送のトラック故障で、ベッド製作は遅れているが、広い床に手足を伸ばして眠ることができる。</p> <p>電気はない。これが他の学生寮と違うところで、CMBとしては、今工事用に持ち込んでいる発電機を、今後も使うことを考えている。夕方3時間の点灯でも予習復習に便利だ。</p> <p>空き地にはすでにナスとキャッサバが育っていた。豚や鶏の飼育も予定していて、米を除く食糧自給の準備が進む。</p> <p>(写真左:ミアソン寮生・ほぼ完成の男子寮前で)</p>